

国語科教科論（前期）

国語部

1 教科等の本質

まず、小学校では、1900年に「国語科」となって「小学校令施行規則」に「国語ハ普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ知徳ヲ啓発スルヲ以テ要旨トス」と国語科の目標が明示された。1941年の「国民学校令」では「国民科国語ハ日常ノ言語ノ習得ニシメ人民ノ理解力ト発表力ヲ養ヒ国家的思想感情ヲ涵養シテ国民精神ヲ頌養スルモノトス」となり、1958年では「日常生活に必要な国語の能力を養い、思考力を伸ばし、心情を豊かにして、言語生活の向上を図る」としている。これらの変遷から読み取れるように、国語科は一貫して、「日常生活に必要な基礎的な言語能力を育てること」を目的としてきた。そして平成29年告示の学習指導要領の中で、国語科の教科の目標は「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」とし、資質・能力を三つに整理された。

ここでの「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とは、「国語で表現された内容や事柄を正確に理解する資質・能力、国語を使って内容や事柄を適切に表現する資質・能力であるが、そのために必要となる国語の使い方を正確に理解する資質・能力、国語を適切に使う資質・能力を含んだものである。」とされている。つまり、「正確な理解」とは、単に文章に書かれている内容を理解することに留まらず、どのような言葉を使えば、どのように伝わるかということを理解することである。それを理解し、表現することで子どもは自分が使う言葉への自覚を高め、よりよく言葉を使おうとしていく。

これらのことから、国語科の本質は「よりよく言葉を使うこと」にあると捉えることができる。「聞くこと」「読むこと」を通して理解した言葉の使い方を基に、「話すこと」「書くこと」で相手に伝えようとすることで、正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育むのである。つまり、この本質にたどり着くためには、単に知識や技能を習得する段階を越えて、深く考え、創造的に国語を用いる力が求められる。石井(2015)は、学力や学習活動の階層を、資質・能力の育成と関連付けて整理した。

		資質・能力の要素（目標の柱）			
学力・学習活動の階層レベル（カリキュラムの構造）		知識	スキル		情意（関心・意欲・態度・人格特性）
			認知的スキル	社会的スキル	
教科の枠付の中での学習	知識の獲得と定着（知っている・できる）	事实的知識、技能（個別的スキル）	記憶と再生、機械的実行と自動化	学び合い、知識の共同構築	達成による自己効力感
	知識の意味理解と洗練（わかる）	概念的知識、方略（複合的プロセス）	解釈、関連付け、構造化、比較・分類、帰納的・演繹的推論		内容の価値に即した内発的動機、教科への関心・意欲
	知識の有意義な使用と創造（使える）	見方・考え方（原理、方法論）を軸とした領域固有の知識の複合体	知的問題解決、意思決定、仮説的推論を含む証明・実験・調査、知やモノの創発、美的表現（批判的思考や創造的思考が関わる）	プロジェクトベースの対話（コミュニケーション）と協同	活動の社会的レリバンスに即した内発的動機、教科観・強化学習観（知的性向・態度・思考の習慣）

「使える」レベルにたどり着くためには、「使える」レベルの活動を目標に据え、目標を達成するために学習を進めることが必要である。つまり、表現するというゴールを見据え、表現方法に着目しながら文章を読み進めることで言葉の使い方を正確に理解し、適切な表現を「使える」ようになる。

文学的文章の学習においては、教材文の描写や構成の工夫に着目することで、登場人物の心情の変化や主題等が読み取れる。それらを基に自身の捉えた教材の魅力を伝える文章を書くことで、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力が育まれる。

魅力を「よりよく」伝えるには、本文の描写や構成意図を根拠とした教材に対する正確な理解が必要である。正確な理解を基に、どの根拠を用いて説明すれば、自分の捉えた魅力が相手に納得してもらえるか、適切な表現を模索していく。魅力の捉え方は根拠や考え方によって異なるため、適切な表現の仕方も一様ではないと考えられる。

以上を踏まえると、文学的文章の学習においては、作者の描写や構成の工夫から登場人物の心情の変化や主題等を読み取り、それを基に自らが捉えた魅力を「よりよく」伝えようとする言語活動が重要となる。このような学習の中で、「この教材における魅力は何か」という課題に向き合い、「どうすれば自分の捉えた魅力をよりわかりやすく相手に伝えることができるか」という問いを自ら立て、「自身の考えを伝えること」に向かってエージェンシーを働かせながら学習を進めていくだろう。

説明的文章の学習においては、教材文から相手に筆者の工夫や考えを伝えるための表現方法を読み取ることができるだろう。そこでの気付きを基に自らの考えを伝える文章を書くことで、国語で正確に理解し適切に表現する力が育まれると考える。

ここでいう「伝える」とは、単なる情報の提示にとどまらず、①「内容を理解させる段階」②「意図や思考を共有する段階」③「行動や態度に変容をもたらす段階」という三つの層から捉え考えていく。説明的文章の学習において、子どもたちがどの段階を目標とするかによって表現の方法や構成は異なり、それを意識して教材文を読み、文章を書くことで、より明確で説得力のある文章表現が可能になる。

以上を踏まえると、説明的文章の学習においては、文章を読んだ相手にどの程度伝わってほしいのか目標を定め、そのためにはどのような表現をしなければならないか教材文を基に考え、表現することができるようにする。そしてその文章を互いに読み合い、対話を重ねていくことで「よりよく伝えるにはどうすればよいか」という課題に向かって学習を進めていくだろう。

2 国語科での四つの学習活動

文学的文章の学習では、四つの学習活動を以下のように整理した。

ためし	○文章を読んだ上での、自分の感想を伝え合う時間 ・文章に対する自分の感想を伝える
みがき	○自分の考えを伝えるための表現や文章を推敲したり、改善したりする時間 ・「ためし」の活動で課題と感じたこと見出し、挑戦する時間 ・書いたり話したりして表現を磨く時間
さぐり	○文章や物語の深層を探り、背景や意図を理解し思考を深める時間 ・課題を解決するための「問い」について考える時間 ・「物語の背景、登場人物の気持ちや作者の意図」について考える時間
つなぎ	○学習方法を検討したり、より伝わる書き方について話し合ったりする時間 ・「さぐり」で気付いたこと、知ったことを共有する

「この物語文における魅力は何か」という本質的な課題を、中心人物の変容を軸にして捉え、四つの学習活動を選択していく。はじめに、初読の感想を書いたり、疑問に思ったことや話し合ってみたいことを共有したりする活動を行う。文章を読み、自分なりの考えを形成する時間を「さぐり」の活動として設定する。どのような疑問を解決していけば物語を読み深めることができるか「つなぎ」として設ける。これらの活動を繰り返し行うことで、自分なりの解釈をもつことができるようになる。それを基に、自分の解釈を相手に分かりやすく伝えるための文章を考えたり、話し合ったりする時間を「みがき」の活動として設定する。「みがき」の活動で新たに得た視点や考え方を基に、自分の考えが相手に伝わるかを「ためし」の活動で確かめる。

説明的文章の学習では、四つの学習活動を以下のように整理した。

ためし	○話題に対する自分の考えを相手に伝える時間 ・自分で書いた文章を基に考え伝え合う
みがき	○自分の考えを伝える文章を推敲する時間 ・教材文から捉えた、伝えるための工夫を用いて書く
さぐり	○文章の何に注目すればよいか考えたり、自分の考えをより伝える書き方について調べたりする時間 ・課題を解決するための「問い」について考える ・教材文から、よりよく書くための工夫を探す
つなぎ	○学習方法を検討したり、より伝わる書き方について話し合ったりする時間 ・「さぐり」で気付いたこと、知ったことを共有する

「どうすれば自分の考えをより伝えることができるか」という本質的な課題を、筆者の書き方の工夫を中心にして捉え、四つの学習活動を設定していく。はじめに、教材文から筆者の書き方の工夫を読み取ったり、自分の書いた文章と教材文を比較したりする活動を通して、どうすればわかりやすく述べることができるか「さぐり」の活動で考えをもつ。この活動を通して形成された考えを他者と共有する時間を「つなぎ」として設ける。これらの活動を繰り返し行うことで、文章の書き方について自分なりの考えをもつことができるようになる。それを基に文章を書く時間を「みがき」の活動として設定する。「みがき」の活動で完成させた文章がどこまで相手に伝わるかを「ためし」の活動で確かめる。

このような学習活動を、子どもたち自身がこれまでの学習経験をもとに選択・構成しながら繰り返し行っていくことにより、「どのように学べば、どのような力が身につくのか」という学びの意味を内省的に捉える力が育成されていくと考えられる。

3 引用・参考文献

文部省（1900）「小学校令施行規則（抄）」

文部省（1941）「国民学校令」

文部科学省（1958）「小学校学習指導要領」

文部科学省（2017）「小学校学習指導要領」

石井英真（2015）「今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影」日本標準 より一部改変